



女性の自由を求め 渡仏したアイデアリスト

三嶋愛子さん

Aiko Mishima | Ancienne secrétaire à Mitsubishi France

肩書き：フランス三菱商事元秘書

経歴：1928年、東京都生まれ。日本で国語教師を務める。フランス文学に出会ってフランスに行くことを決意。渡仏に反対する家族を説得し、58年、単身パリに渡る。ソルボンヌで仏語、仏文学を学ぶ。フランス三菱商事で秘書として32年間勤め、シングルマザーで一人息子を育てる。リタイア後に小説を書き始め、2014年6月に処女作を出版。

嗜好：リタイアしてから俳句を始めました。旅行も好きで、昔は南米に行ったり、長いバカンスではフランスの一地方にゆっくり滞在して、その土地をより深く知る旅をしていました。

戦後間もなくの渡仏は難しかったのでは？

日本文学が専門だったのですが、大学卒業後にフランス文学に興味を持ち、フランス語を勉強し始めました。フランスに行きたいと言い続けていましたが、渡航できるような時代ではなく、それは夢のまた夢でした。ようやく日本の経済が立ち直り始めたのは50年代後半。学者や芸術家が渡米、渡欧するようになっていました。

今では想像できないと思いますが、当時日本は大変な男性本位。何よりそんな日本社会に難しさを感じていました。女子は大学を出ても仕事がありません。でも私は、結婚して夫の収入に頼って生きていくことは物足りないと感じ、自分の仕事を持ち自活したいという気持ちが非常に強かったのです。私はブルジョワ家庭に育ち、両親は、「勉強をして何になる。世間はどう思うか。教師として働くなんてとんでもない」と考えていました。渡仏について、母が特に反対しましたが、父もロンドン勤務を経験し西洋を知っていたにも関わらず反対でした。

なぜフランスでシングルマザーを？

渡仏時はアルジェリア戦争の真っただ中で、フランスは暗かったのですが、絶対に日本には帰らないと決心していました。そのフランスで恋人ができ、妊娠出産。彼は日本に帰り、私は子供とフランスに残りました。

日本だったらどんな目で見られるか……。想像できますね。当時も割とシングルマザーのいたフランスでは、女性が自由に自分の道を選べました。私の幸せの定義は、どんな環境であれ自分の能力を精いっぱい伸ばせること。

義姉の父が三菱商事だった関係で同社に就職しました。でも、一番大変だったのは経済的なことでした。あくまでも自活しかかったので、アイデアリストの私は両親からの仕送りを断っていました。この国でお鍋を買うと、ふたが付いてい

ません。お鍋を買ったら次の目標はふた。そんなふうに計画して目標を達成してきました。しまいには、ゲームみたいで、ちょっとした楽しみになりましたよ。

フランスでは年齢や経済状態、身分に関わらず、自分の好きなことができると感じました。フランスにいたからこそ、1人で子育てをしてみようというアイデアが生まれたし、リタイアしてから小説を書くなんて常識外れなことができたのですから。ここは周りからの干渉が少ない自由な国。

85歳で処女作を出されましたね。

日中戦争が始まったのは8歳のとき。日本は神の国というような狂信的な教育をそれから8年間、16歳まで受けてきましたが、16歳のときに日本のみじめさの象徴である闇市を見てそれがひっくり返ったのです。昨日までの真実がうそに。そんな衝撃は小説でないと表せないと思いました。

7人兄弟の下の方だった私を育ててくれた乳母は、戦いが拡大し田舎に戻りました。戦後の食糧難で知己を頼って食べさせてもらう人が多い中、私は彼女の所に。そのとき、彼女は夜中に家族を動員してお餅をついてくれたのです。その味は忘れられません。それが処女作の題です。歯応えのあるお餅に「平和が来たんだなあ」と感激しました。

Le goût du motchi

幸福な子供時代の記憶、目撃した戦後の闇市などを通して、青年期のアヤコが苦勞しながら自分の道を模索する。戦後1945～52年の日本の姿を紹介した珍しい著作。



L'Harmattan出版
Aiko Mishima著
ISBN 978-2-343-03094-4